

## 平成 20 年度後期 学生授業アンケート分析報告

### 0 . はじめに

本稿は、平成 20 年度後期に開講された授業に対する学生アンケートの結果とその分析について報告するものである。

本調査の目的は、教員の授業改善を目指して、授業改善に資する情報を収集することであった。本調査は、上武大学の全学部生を対象に、学期末の授業時間内に実施された。

### 1 . 多肢選択型調査項目に関する結果と分析

多肢選択型調査項目について集計したデータを分析する。分析には 7181 件(大学全体)のデータを対象とした。その内訳はビジネス情報学部が 3083 件、経営情報学部が 1550 件、看護学部が 2548 件であった。ここでは、上武大学の全学、各学部の傾向を探るために必要となる結果を取り上げ、分析した。

#### (1) 予習・準備の平均時間

設問(2)で、「この授業のために毎回平均してどれくらい予習や準備をして臨みましたか。」が出題された。結果は次の通りであった。

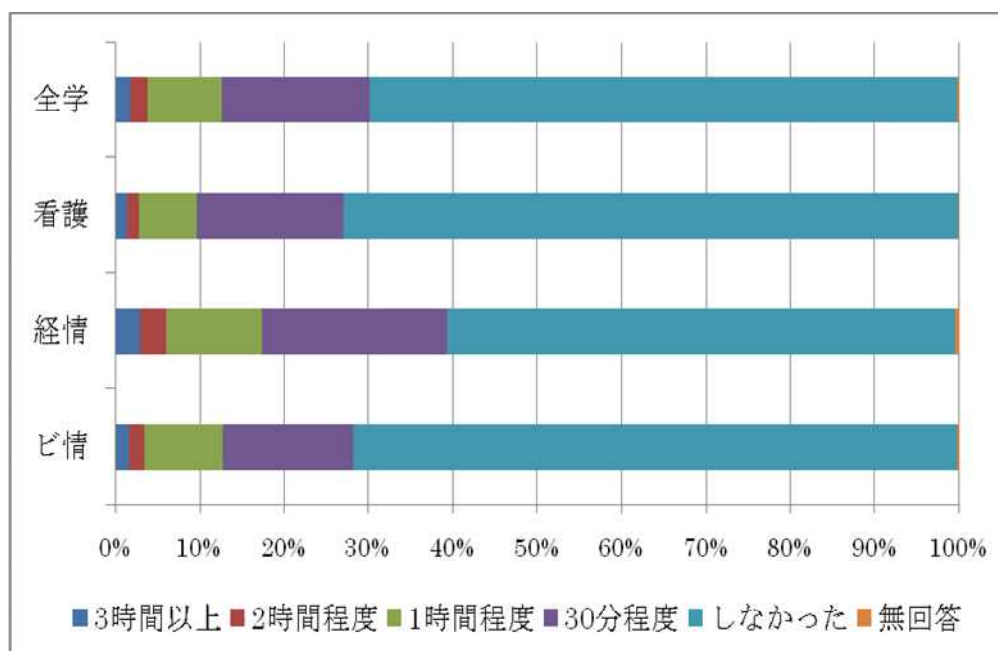


図1 予習・準備時間の平均時間

表1 設問(2)に対する各学部・全学の割合

選択肢	ビ情	経情	看護	全学
3時間以上	2%	4%	2%	2%
2時間程度	3%	3%	2%	3%
1時間程度	9%	11%	8%	9%
30分程度	15%	21%	13%	16%
しなかった	71%	61%	75%	70%
無解答	0%	0%	0%	0%

図1のグラフと表1より、各学部、そして全学においても、授業に臨むにあたって予習あるいは準備をしていない傾向がみられる。特に、看護学部の学生の割合が75%と一番多く、経営情報学部の学生の割合が61%で3学部の中では最も割合が低かった。そして、全学でも予習・準備をしなかったと回答した学生が70%と多かった。

この結果は、上武大学全体として、予習や準備をして授業へ臨む学生が少ないことを示しており、学習に対する意欲が低く、なおかつ学習習慣が確立していないことを示唆している。

## (2)復習の平均時間

設問(3)で、「復習は毎回平均でどれくらいしましたか。」が出題された。結果は次の通りであった。

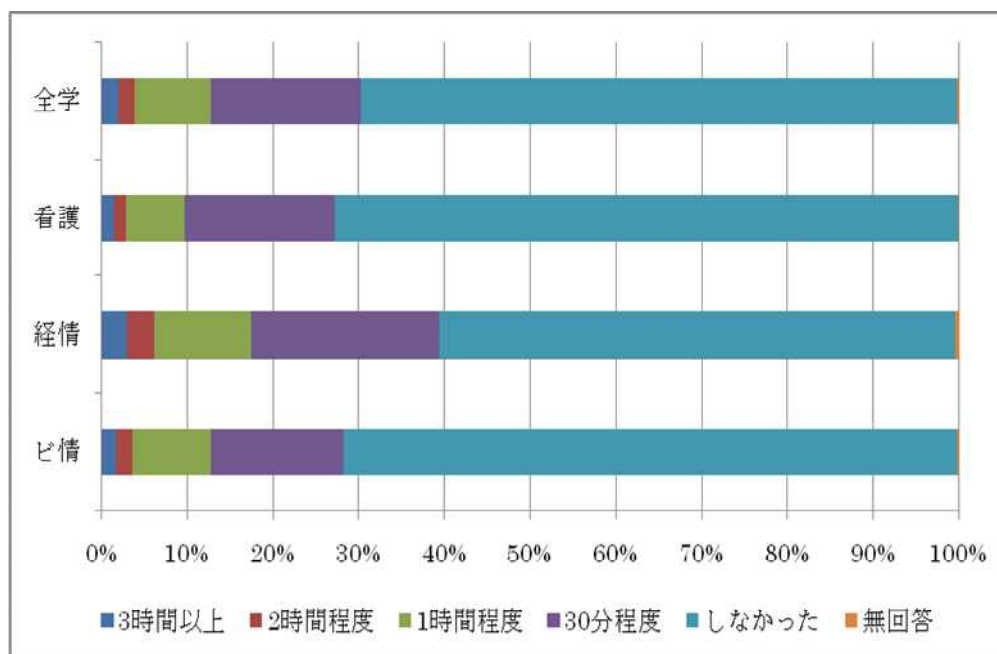


図2 復習の平均時間

表2 設問(3)に対する各学部・全学の割合

選択肢	ビ情	経情	看護	全学
3時間以上	2%	3%	1%	2%
2時間程度	2%	3%	1%	2%
1時間程度	9%	11%	7%	9%
30分程度	16%	22%	18%	18%
しなかった	71%	60%	73%	69%
無解答	0%	1%	0%	0%

図2のグラフと表2より、経営情報学部を除き、ビジネス情報学部、看護学部、そして全学においても、約7割の学生は復習をしていないと回答した。その中で、経営情報学部だけ「しなかった」を回答した学生が60%であった。しかし、全体的な傾向として、上武大学では復習をしない学生が多いことが示されている。

### (3)欠席回数

設問(4)で、「この授業について、あなたは何回くらい欠席しましたか。」が出題された。結果は次の図3の通りであった。

図3より、ビジネス情報学部と経営情報学部は類似した傾向を示していることがわかる。「欠席なし」、「1・2回」の項目を回答している学生が65%で、「3・4回」まで含めると85%強に至っている。一方、看護学部は「欠席なし」の項目が約80%を示しており、「欠席なし」、「1・2回」の項目を回答しているのは90%を超えている。そして、全学でも、「欠席なし」、「1・2回」の項目を回答しているのは70%を超えている。

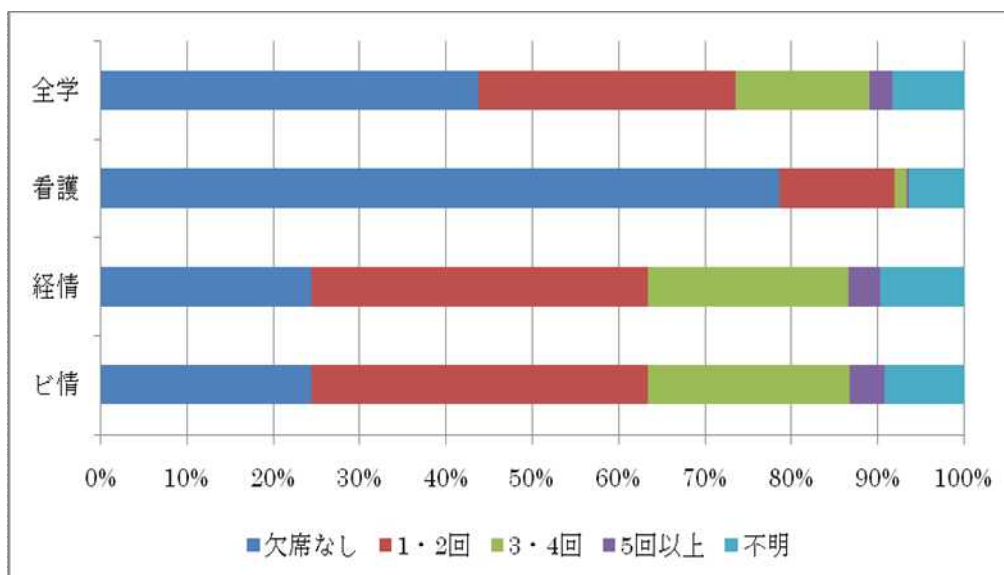


図3 欠席回数

以上の図3から、各学部と全学両観点から、上武大学の学生は、授業への出席に対する意識が高い傾向にあることがわかる。

#### (4)授業への意欲

設問(8)では、「総合評価として、あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか。」を出題した。結果は図4の通りである。

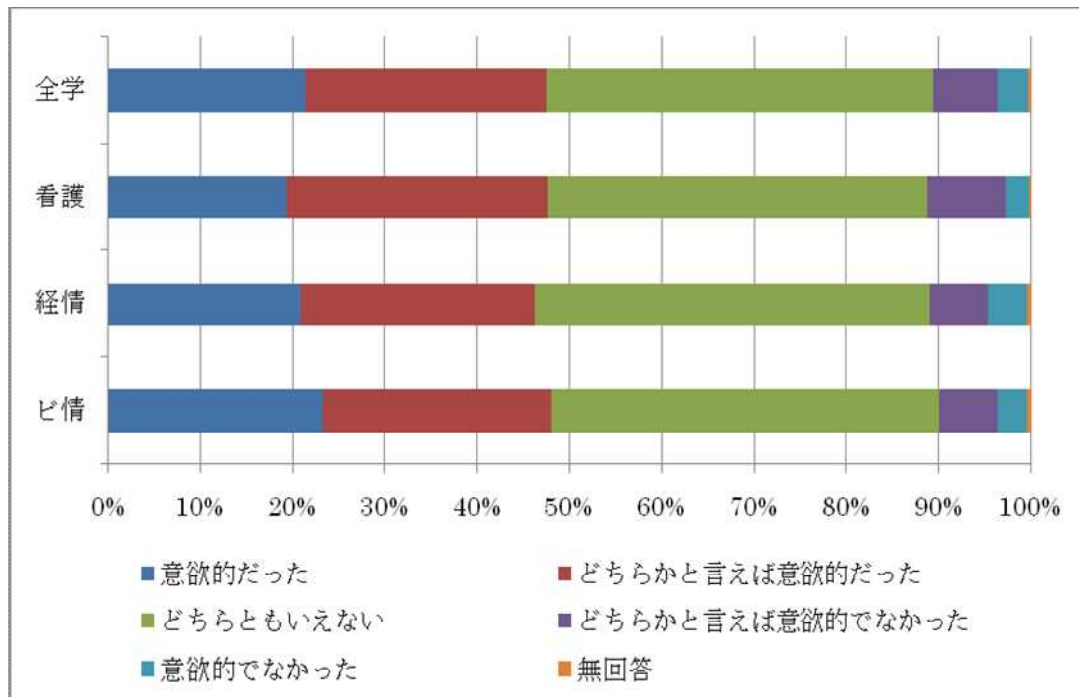


図4 授業への意欲

表3 設問(8)に対する各学部・全学の割合

選択肢	ビ情	経情	看護	全学
意欲的だった	23%	21%	19%	21%
どちらかと言えば意欲的だった	25%	25%	28%	26%
どちらともいえない	42%	43%	41%	42%
どちらかと言えば意欲的でなかった	6%	6%	9%	7%
意欲的でなかった	3%	4%	3%	3%
無回答	1%	1%	0%	1%

図4より、各学部、そして全学においても肯定的な反応を示す学生は50%に至っていない。表3をみると、ビジネス情報学部は48%、経営情報学部は46%、看護学部は47%、そして、全学では47%であった。しかし、否定的な回答（「どちらかと言えば意欲的でなかった」、「意欲的でなかった」）は、ビジネス情報学部では9%、経営情報学部では10%、看護学部では12%、そして、全学では10%であった。これは、上武大学の学生は各学部を問わず、全学として、授業に意欲的に取り組む傾向にあることを示唆している。

(5)さらなる勉強の意欲の喚起

設問(18)で、「この授業によって刺激を受け、さらに勉強したくなりましたか。」を出題した。結果は、次の図5の通りである。

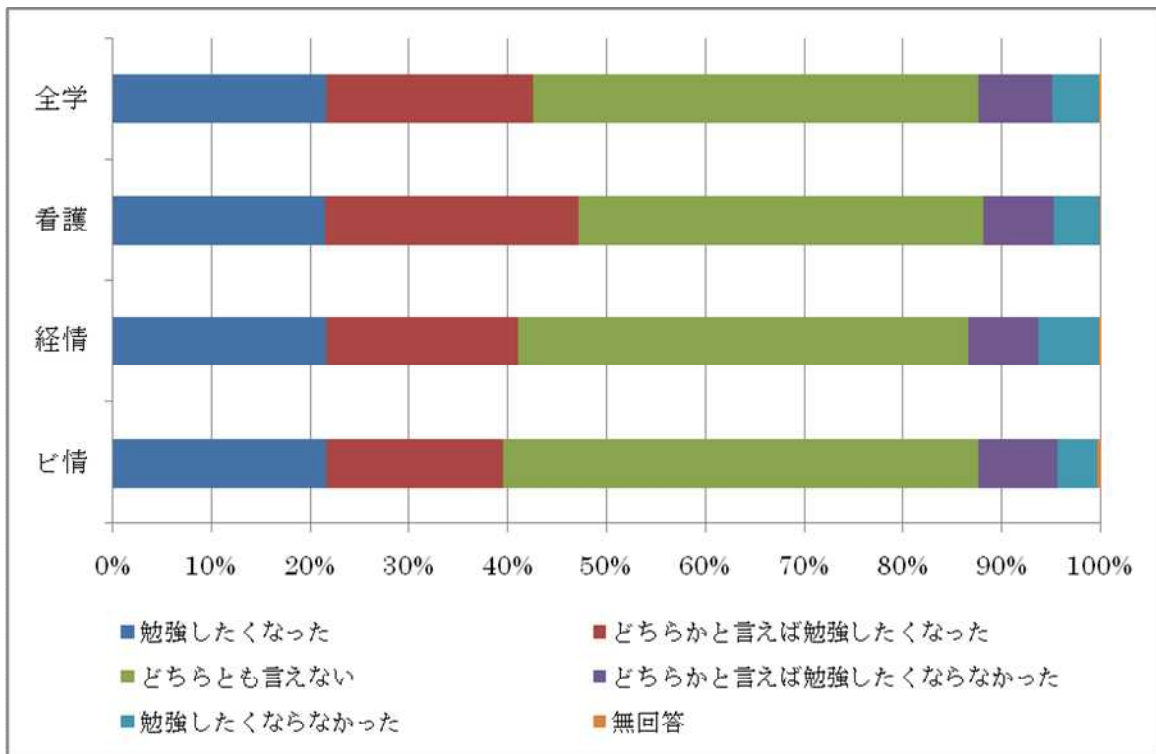


図5 さらなる勉強の意欲の喚起

表4 設問(18)に対する各学部・全学の割合

選択肢	ビ情	経情	看護	全学
勉強しなくなった	22%	22%	21%	21%
どちらかと言えば勉強しなくなった	18%	19%	26%	21%
どちらとも言えない	48%	46%	41%	45%
どちらかと言えば勉強しなくならなかった	8%	7%	7%	8%
勉強しなくならなかった	4%	6%	5%	5%
無回答	0%	0%	0%	0%

図5より、各学部とも、さらなる勉強の意欲の喚起について、肯定的な反応(「勉強しなくなった」、「どちらかと言えば勉強しなくなった」)の割合が低いことがわかる。特に、ビジネス情報学部、経営情報学部はいずれも40%程度に留まっている。そして、両学部とも、中間的反応(「どちらとも言えない」)の方が肯定的反応よりも多かった。このように、両学部は設問(18)について類似した傾向を示している。また、看護学部は肯定的反応が47%で、50%に達していないが中間的反応よりも多かった。

また、図5と表4より、全学でも、肯定的反応が42%と5割に至っておらず、中間的な反応よりも低いポイントだった。

(6)教員の説明

設問(11)で、「教員の説明はわかりやすかったですか。」が出題された。結果は、次の図6の通りである。

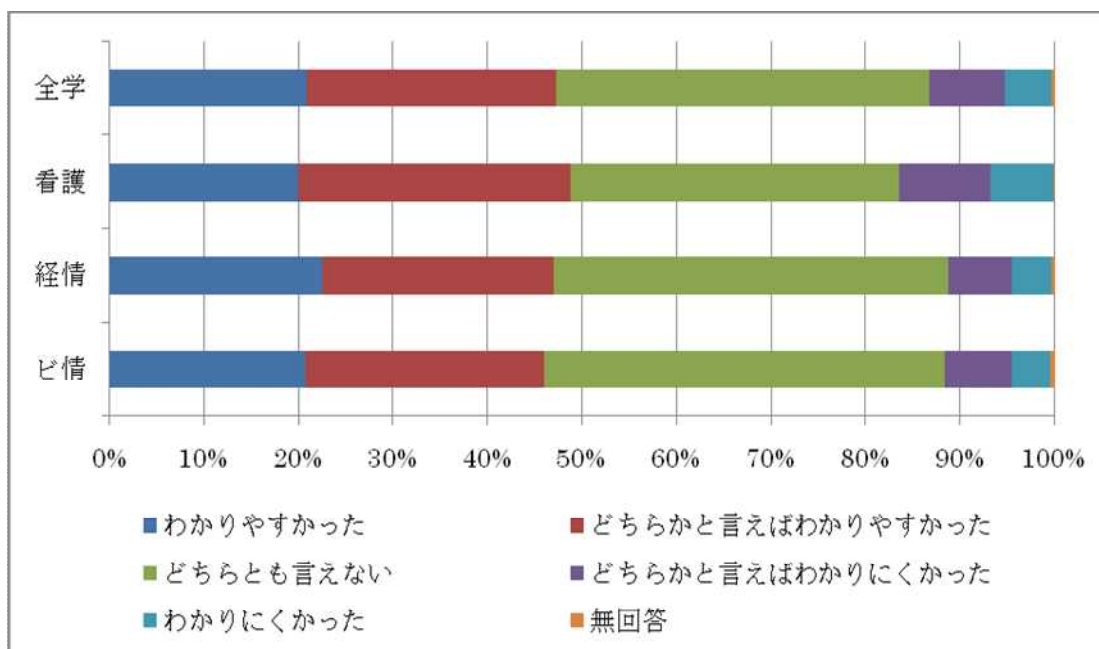


図6 教員の説明のわかりやすさ

表5 設問(11)に対する各学部・全学の割合

選択肢	ビ情	経情	看護	全学
わかりやすかった	21%	22%	20%	21%
どちらかと言えばわかりやすかった	25%	25%	29%	26%
どちらとも言えない	42%	42%	35%	40%
どちらかと言えばわかりにくかった	7%	7%	9%	8%
わかりにくかった	4%	4%	7%	5%
無回答	1%	0%	0%	0%

図6より、教員の説明のわかりやすさについて、肯定的反応(「わかりやすかった」、「どちらかと言えばわかりやすかった」)は、ビジネス情報学部が46%、経営情報学部が47%、看護学部が49%、そして全学が47%と、各学部だけでなく、全学でも50%に至らなかった。しかし、否定的な反応(「どちらかと言えばわかりにくい」、「わかりにくかった」)は、ビジネス情報学部が11%、経営情報学部が11%、看護学部が16%、そして、全学で13%であり、肯定的反応の方が多い。

よって、学生は、当該授業において、教員の説明が分かりやすいと思っている傾向がある。各学部間を比較すると、ビジネス情報学部と経営情報学部は類似の傾向を示しているが、看護学部は、他学部に比べて、否定的な反応が多い傾向にある。表5にみるように、看護学部の学生の16%は、否定的な反応を示している。

(7)板書やプレゼン用ソフトの見やすさ

設問(13)で、「板書やプレゼン用ソフトは見やすかったですか。」を出題した。結果は、次の図7の通りである。

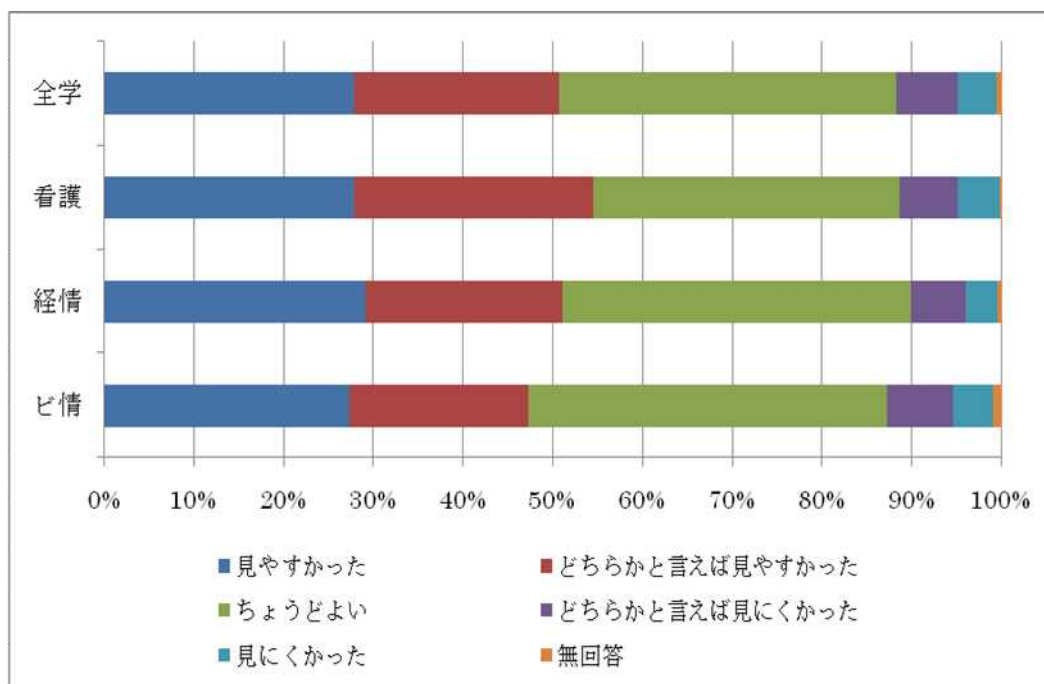


図7 板書、プレゼン用ソフトの見やすさ

表6 設問(13)に対する各学部・全学の割合

選択肢	ビ情	経情	看護	全学
見やすかった	27%	29%	28%	28%
どちらかと言えば見やすかった	20%	22%	27%	23%
ちょうどよい	40%	39%	34%	38%
どちらかと言えば見にくかった	7%	6%	6%	7%
見にくかった	5%	4%	5%	4%
無回答	1%	0%	0%	0%

図7より、各学部、全学ともに、肯定的反応(「見やすかった」、「どちらかと言えば見やすかった」)が一番多かった。その中で、ビジネス情報学部だけが47%と、肯定的反応が50%に至らなかった。一方で、看護学部は55%と、3学部の中で最も高かった。

また、否定的反応(「どちらかと言えば見にくかった」、「見にくかった」)について、ビジネス情報学部が12%、経営情報学部が10%、そして看護学部が11%であり、否定的反応よりも肯定的反応の方が多かった。これは、各学部とも設問(13)について肯定的な傾向があることを示している。

そして、全学でも、肯定的な反応を示す割合が51%と、全設問の中で最も高く、否定的な反応も11%であった。これは、全学でも、設問(13)について肯定的な傾向があることを示している。

## 2. 自由記述に関する結果と分析

自由記述の分析対象は、ビジネス情報学部が 287 件、経営情報学部が 133 件、そして、看護学部が 231 件の 651 件であった。自由記述を、【肯定的回答】と【否定的回答】に分類し、その傾向を分析した。以下、授業改善上、配慮する必要がある項目を取り上げることとする。

### (1) 肯定的回答

全学の傾向として、一番多かったのは、授業が「わかりやすい」であった。これは 3 学部の学生が記述していた。その他に、3 学部の学生が共通に指摘している観点として、「いい授業だった」、「よかった」があった。

次に、「楽しかった」や「面白かった」という意見が多かった。これは、ビジネス情報学部での記述が一番多かった。ビジネス情報学部の学生は、教員に対する評価を記述しているところに特徴がある。中でも、「やさしい先生」、「親切な先生」、「素晴らしい先生」など他学部では見られない記述が目立った。

また、全体的な傾向として、当該授業が今後の将来に役立つ、授業内容の理解に役立つなど、「役に立った」も多かった。特に、ビジネス情報学部、経営情報部に多く見られた。一方で、看護学部の学生は、「さらなる勉強に興味を持った」という意見を多く記述していた。この意見は、他の 2 学部では少数に留まっていた。

最後に、看護学部では、「DVD、ビデオ、資料を使ったこと」、「プリントや資料が見やすいこと」が指摘されているところに特徴がある。この点に関して、設問(14)で、「教科書、資料、ビデオなどの教材は、授業理解の上で役に立ちましたか。」が出題され、設問(14)について、看護学部の肯定的反応が 56%で一番高かった。これは、多肢選択型調査と自由記述調査の結果が整合していることを示している。

### (2) 否定的回答

否定的回答で、最も多かったのは「板書の字が汚い、字が見えにくい」であった。ビジネス情報学部と看護学部で、この意見が多かった。

次に多かったのが、「わからない」「わかりにくい」、そして「説明がわかりにくい」であった。これも、ビジネス情報学部と看護学部で多かった。

そして、看護学部が目立った意見として、「教員間の連携が悪い」や「授業になっていない」、「授業の段取り・計画性」などがあつた。また、プリントが見にくい、使いにくい等、配布資料についての否定的な指摘が多かった。

最後に、少数意見ではあつたが、二点の配慮事項が明らかになった。第一に、学生の質問に適切に答えられないという指摘と、生徒から指摘された誤りを修正しないという指摘である。これは、教育に対する教員の資質、姿勢に関わる問題であり、授業改善へ向けて十分に配慮する必要がある。

第二に、暴言、罵声、馬鹿にしている等々、ハラスメントに関する指摘である。この件は、いかなる理由があろうとも、決してやってはいけないことである。教員が再度確認し、十分に注意しなければならない。



### 3. 因子分析・重回帰分析に基づく授業アンケートの結果分析

ここでは、授業アンケートの設問(6)から(19)に関して、「授業の理解と満足に対してどのような要素(要因)がどのくらい影響しているのか、その影響度合いを解析した。したがって、設問(7)「授業の内容を理解できましたか」と、設問(19)「この授業に全体的に満足できましたか」の結果を独立変数として解析した。なお、各設問は、「肯定的回答(5点)」から「否定的回答(1点)」の順序尺度で聞いているが、1点から5点の得点差の大小に意味を持つため、間隔尺度として扱った。その中で、設問(9)「授業の難易度」と設問(10)「授業の進行速度の質問項目」は、の「丁度よかった」が最もよい得点と考えるなら、他の質問項目の得点配置と異なってくるため、今回の解析では、この設問項目を除外した。その結果、因子分析では、9550件回収した中で7170件が有効回答となった。

また、重回帰分析では、(13)、(14)、(15)の各設問で「0」と回答した学生のデータを除外し、1点から5点のいずれかに回答のあったデータを対象とした。したがって、因子分析をかけた7170件の中から、(13)、(14)、(15)の各設問で「0」と回答した学生のデータを除外し、1点から5点いずれかに回答した6464件を分析対象とした。

#### (1) 因子分析

初期解の推定には、一般化した最小二乗法を用いて、因子の回転としてオブリミン法を用いた<sup>1)</sup>。そして、因子数の決定においては、カイザーガットマン基準(固有値を1以上の因子を採用する)やスクリープロット基準(固有値の低下が穏やかになる手前までの因子)では一因子となったが、一因子では分解意味づけが煩雑になるため、因子の意味づけに納得のいく四因子に決定した。

回転後の因子負荷量は、次頁の表7の通りである。第2因子の「ノートやメモをとった」の設問項目は、因子負荷量が0.506と低く、共通性も0.268と低いため第2因子から除外した。したがって、第3因子の0.803以上の因子負荷量が、因子意味づけの判断基準とした。

因子分析の結果、第1因子は「教材の工夫」、第2因子は「学習の意欲」、第3因子は「授業内容の質」、第4因子は「教員の態度」と解釈された。

まず、第1因子は「教材の工夫」に関する設問項目の集まりと解釈された。設問(15)「教員は質問に適切に答えていましたか。」は、学生からの質問をうまく利用して教材化して学生に返すと考えれば、第1因子の「教材の工夫」と関連している。また、他の2つの設問(13)「板書やプレゼン用ソフトは見やすかったですか。」、設問(14)「教科書、資料、ビデオなどの教材は、授業理解の上で役に立ちましたか。」に関しても、第1因子と関連している。そして、クロンバックの信頼係数 $\alpha=0.897$ であり、0.8以上を示しており、3つの設問項目は内的整合性を持つと言える。

なお、「理解に役立つ教材」、「質問に対する教員の適切な対応」は第3因子にも高い負荷量を示している。さらに、「質問に対する教員の適切な対応」は第4因子の「教員の態度」へも高い負荷量となっている。

次に、第2因子は「学習の意欲」に関する設問項目と集まりと解釈された。しかし、第2因子については、設問(6)「ノートやメモをとったか。」を除外したために、設問(8)「総合評価として、あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか。」だけとなった。

そして、第3因子は、学生の学びに対する達成感やモチベーションを刺激する質的要素をもつ因子の集まりと考え、「授業内容の質」に関する設問項目の集まりと解釈された。第3因子については、設問(17)「教養や専門の知識を深めたり、技能を身につけたりする上で、この授業は役に立ちましたか。」、設問(18)「この授業によって刺激を受け、更に勉強したくなりましたか。」、そして設問(16)「教員の熱意を感じましたか。」が、第3因子と関連する設問項目である。そして、クロンバックの信頼係数  $\alpha = 0.891$  で、0.8以上を示しており、(16)、(17)、(18)の3つの設問は内的整合性を持つと言える。

最後に、第4因子は、「教員の態度」に関する設問項目の集まりと解釈された。第4因子について、設問(11)「教員の説明はわかりやすかったですか。」と設問(12)「教員の声は聞き取りやすかったですか。」が関連する設問項目である。クロンバックの信頼係数  $\alpha = 0.855$  で、これも0.8以上を示しており、(11)、(12)の2つの設問は内的整合性を持つと言える。

表7 因子分析の結果

	因子				共通性
	1	2	3	4	
<b>教材の工夫</b> $\alpha = 0.897$					
理解に役立つ教材	0.929	-0.598	-0.764	0.671	0.870
質問に対する教員の適切な対応	0.847	-0.592	-0.786	0.768	0.778
板書やプレゼンの見やすさ	0.815	-0.529	-0.662	0.693	0.680
<b>学習の意欲</b>					
授業に意欲的に取り組んだ	0.592	-0.987	-0.667	0.545	0.976
ノートやメモをとった	0.343	-0.508	-0.374	0.299	0.268
<b>授業内容の質</b> $\alpha = 0.891$					
知識を深め技能を身につける上で役立つ授業	0.769	-0.650	-0.951	0.676	0.905
刺激を受け更に勉強したくなる授業	0.694	-0.657	-0.836	0.628	0.717
教員の熱意	0.732	-0.564	-0.803	0.764	0.720
<b>教員の態度</b> $\alpha = 0.855$					
教員の声のききとりやすさ	0.712	-0.539	-0.678	0.884	0.789
教員の説明のわかりやすさ	0.717	-0.595	-0.711	0.826	0.730
合計	5.490	1.297	0.319	0.273	
分散の%	54.899	12.969	3.194	2.732	
累積%	54.899	67.868	71.062	73.793	

因子抽出法：一般化された最小二乗 因子負荷量 0.803 以上

回転法：Kaiser の正規化を伴うオブリミン法

そして、表 8 より、KMO ( Kaiser-Meyer-Olkin ) 測度は 0.935 で、Bartlett の球面性検定は  $p < 0.001$  で有意となり、因子分析適用の妥当性が保障された。

表 8 KMO および Bartlett の検定

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		0.935
Bartlett の球面性検定	近似カイ二乗	50308.888
	自由度	45
	有意確率	0.00

また、表 9 より、因子相関行列では、相関係数  $|r| > 0.9$  のような高い相関係数を示すものは見当たらないが、第 1 因子「教材の工夫」と第 3 因子「授業内容の質」は、 $r = -0.805$  と高めで、強い相関関係にあることを示唆している。

表 9 因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1	-0.620	-0.805	0.761
2	-0.620	1	0.691	-0.555
3	-0.805	0.691	1	-0.721
4	0.761	-0.555	-0.721	1

## (2)重回帰分析

ここでは、因子分析によって明らかになった 4 つの因子の中で、「満足できる授業」と「授業の内容を理解できた」ことに寄与する因子は何かを明らかにするために、重回帰分析を行った。結果は表 10 の通りであった。

表 10 ステップワイズ法による重回帰分析

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
従属変数： 満足できる授業	(定数)	-0.241	0.028		-8.707	0.000		
	授業内容の質	0.213	0.004	0.565	49.434	0.000	0.271	3.685
	教員の態度	0.090	0.005	0.168	16.496	0.000	0.344	2.910
	教材の工夫	0.050	0.004	0.135	12.052	0.000	0.283	3.533
	授業に意欲的に取り組んだ	0.091	0.009	0.086	10.583	0.000	0.536	1.867
従属変数： 授業の内容を理解できた	(定数)	0.199	0.037		5.329	0.000		
	授業に意欲的に取り組んだ	0.479	0.012	0.458	41.199	0.000	0.536	1.866
	教員の態度	0.108	0.007	0.204	14.755	0.000	0.347	2.886
	授業内容の質	0.039	0.006	0.105	6.731	0.000	0.272	3.676
	教材の工夫	0.034	0.006	0.092	5.994	0.000	0.284	3.522

また、表 11 より、分散分析の結果、「満足できる授業」においても、「授業の内容を理解できた」においても、有意 ( $P<0.01$ ) であり、 $R^2$  についても、いずれの従属変数とも 0.5 以上で、適合度は高いと評価した。

表 11 分散分析

	R	R <sup>2</sup> 乗	調整済み R <sup>2</sup> 乗	分散分析有意確率
従属変数：満足できる授業	0.878	0.771	0.771	0.00
従属変数：授業の内容を理解できた	0.757	0.573	0.572	0.00

前頁の表 10 の重回帰分析の結果、「満足できる授業」に関して、「授業内容の質」が 0.565 ( $P<0.001$ ) と一番高く、「満足できる授業」に最も寄与していることがわかる。一方、「授業の内容を理解できた」に関して、「授業に意欲的な取り組んだ」が 0.458 ( $P<0.001$ ) と最も高く、「授業の内容を理解できた」に最も寄与していることがわかる。そして、重回帰分析の結果を表すと次の図 8 になる。

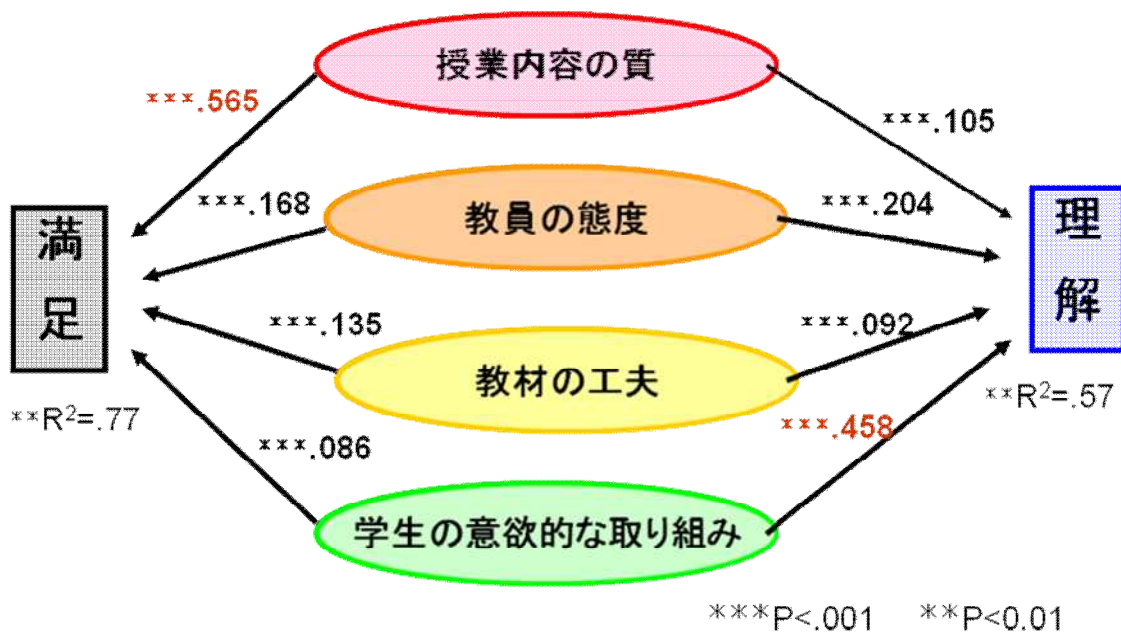


図 8 「授業に対する満足感」と「授業内容の理解」への 4 因子の影響度

### 3. 考察

アンケートの集計結果の分析、自由記述の分析、そして、因子分析と重回帰分析の結果を踏まえて、第一に、学習意欲の向上、第二に、学習習慣の確立、第三に、教育方法（指導技術等）最後に、授業に対する学生の傾向について考察し、本学の授業改善の方策を論じる。

#### (1) 学習意欲の向上

学習意欲の向上は、小学校、中学校、そして、高等学校においても、教育上重要な課題であることが、平成 20 年 3 月と平成 21 年 3 月に改訂された学習指導要領からも伺える。今回のアンケート調査より、上武大学の全学的な傾向として、意欲的に授業に取り組んでいる様子は、さほど見られなかった。しかも、当該授業を受けてさらに勉強したくなったことについても、肯定的な反応は低かった。

授業内容の理解状況について肯定的な反応は 5 割に至っていない状況を考えると、授業内容について学生が理解できるようにするための方策を考えることに終始し、学習意欲の向上まで手が回らないのが実情である。

他方、当該授業内容について関心を引き付けるために、授業の入り口での意欲向上への手立てをしたとしても、その後の意欲の継続、さらには、授業が終わった段階でさらに勉強をしてみたいという。授業後の意欲向上については軽視しがちである。

このように、学習意欲の向上のためには、授業全体の入り口、中間、出口での学習意欲の向上を講じる計画を立て、場面を設定しておく必要がある。

#### (2) 学習習慣の確立

現在、我が国の小学校、中学校、そして高等学校において、学習習慣の確立は重要な命題となっている。これは、各学校段階の学習指導要領第一章総則の中に記されていることから明らかである。しかし、これは、学士力の育成の視点から、初等・中等教育段階に留まらず、高等教育機関である大学においても、学習習慣の確立は重要な命題となっている。この視点から、本学の学生は、授業に臨むにあたっての予習や準備、あるいは授業の後の復習をしない傾向があり、残念ながら、本学の学生は試験期間以外での、普段の学習習慣が確立されていないと言わざるを得ない。

よって、こうした状況を改善するには、学生による日々の努力、挑戦はもとより、宿題とまではいわないが、教員側からも毎回課題を課すなど、テスト期間以外でも当該授業の内容について学習する機会を設定することも一つの方策と考えられる。

#### (3) 指導技術、教育方法

この視点に関しては、特に、本学学生による自由記述をもとに考察する。自由記述をよむと、学生が授業において何を求めているのがみとれる。確かに、少数であるが本質的な意見もある。

おそらく学生が望む授業は、分かりやすい授業である。この観点から、自由記述をみると、授業改善のポイントが明らかになる。第一に、映像や写真等を効果的に使用すること。これは、対象とする内容についてイメージを持たせるため、リアル感を湧

かせるために効果的である。

第二に、プリントやスライド、パワーポイントの使用等、資料やプリントを準備すること。それも、資料の見やすさに配慮する必要がある。これは、アンケート調査でも板書の字の見にくさが多く指摘されている。このような準備をせずして、授業内容を理解する能力がないとあって、学生に責任を転嫁するのは問題である。また、配布プリントも穴埋め形式にするなど、各授業の内容が整理されるように工夫すれば、学生も復習しやすい。

第三に、授業の意図や本時の目的を学生に明示すること。学生の自由記述で、「授業ではどこが大事なのか、ポイントがわからない」、「この授業で何をさせたいのか、何を教えたいのかわからない。」等々、授業の意図や目的が不明確なまま授業を行っているケースがあるようである。

毎回の授業での目的が明確でなければ、その授業で学生が設定した目的を達成したのかどうかを評価することも、目的を達成するためのアプローチも考えることができない。したがって、上述した学生の切実な叫びを引き起こす授業になる。

#### (4) 授業に対する学生の傾向

授業をするに当たって、学生が授業に満足すること、学生が授業の内容を理解することは、主たる目標の一つである。大学において、このような目標を達成するために、学生が授業に満足する要件は何か、学生が授業内容を理解する上で何を必要とするのかといった、学生が期待することを予め把握しておくことは必要である。これらは、授業を構想する上で不可欠な情報である。

まず、重回帰分析より、「満足できる授業」に関して、本学の学生は「授業内容の質」が重要と考えている。具体的には、授業において教員の熱意が伝わるよう配慮する必要がある。淡々と授業をこなすといった授業では、本学の学生は満足しないということがわかる。そして、授業を受けて、知識や技能を身に付けることができるようになるには、学生に身に付けて欲しい知識や技能は何であるかを明確にしておかなければならない。一方、知識については、授業の中で何度も取り上げ、繰り返し問いつけることが考えられ、他方、技能についても、繰り返し実践させたりする機会を、授業の中に組み入れていくことが考えられる。さらに、授業を受けて、もっと知りたい、勉強したいと思えるような授業に、学生は満足するのである。これについては、授業内容の理解度も大いに影響する。なぜならば、授業の内容がある程度理解がないと、更に知りたいという欲求は出てこないからである。

そこで、設問(7)「授業の内容を理解できましたか。」のアンケート調査の結果をみると、各学部、そして全学においても肯定的な回答は50%に至らなかった。しかし、肯定的な回答はビジネス情報学部が12%、経営情報学部が14%、看護学部が16%、そして、全学では14%であり、各学部、あるいは全学では肯定的な回答の方が多かった。これは、上武大学の学生は授業内容について理解していると思っている傾向にあることを示唆している。これが示唆することは、更なる学習への意欲の準備はできているということである。

一方、「授業の内容を理解できた」に関して、重回帰分析より、「授業の内容を理解できた」には、「学生の意欲的な取り組み」の寄与が高かった。つまり、授業の内容の理解については、「授業内容」、「教員の態度」、「教材の工夫」など、教員側の問題だけではなく、「学生側の要因」が大いに影響しているのである。先に議論したように、学習意欲をいかに向上させるかが、本学の授業改善へ向けた一つの柱となる。今後は、本学の学生の学習意欲を、何によって高めるか、あるいは、どのようなことで学生の意欲が殺されるのかを解明し、本学の授業改善につなげたい。

#### 4. おわりに

本学では、シラバスに到達目標が記述されている。これは評価を目標準拠で行うことを意味している。目標準拠評価における評価とは、学生自身が自らの理解状況を的確に把握し、さらなる学習への意欲を喚起させるものでなければならないし、なおかつ、教員が自らの指導(授業)の改善に資する情報を得るために行う教育活動である。この意味で、指導と評価は一体として考えなければならないのである。

この視点から、再度、各授業のねらい、それに対する評価規準、そして評価方法を検討し、授業を見直す必要がある。そこから改善の方策を探る手掛かりが見出されるのではないかと思われる。

最後に、今回のアンケート調査では、学生が正しくマークできなかったため、欠損データが2400件に上った。せっかく時間を割いて調査を実施したにもかかわらず、多くの貴重なデータが無駄になった。こうした状況への早急な対応が必要である。欠損データに関わって、アンケート調査の実施方法の改善もさることながら、調査票自体、各設問内容についても見直す必要がある。設問の問い方が回答する学生にとって、判断しづらかったり、何を問われているのかが伝わりにくかったりしたことも、その理由として考えられるからである。これら調査票(質問内容、問い方)も含め、調査の実施方法等について検討し、修正することが今後の課題である。

#### 注

- 1) シャピロ・ウィルク検定 Shapiro-Wilk test で正規性の検定を行ったが、すべての標本で有意確率.000となり、 $p < 0.001$  で有意となり「正規分布に従わない」ということになった。そこで、天井効果と床効果を確認したところ、回答に明らかな偏りがないことが確認できたため、一般化した最小2乗法を用いて初期解の推定を行った。

#### 5. 引用・参考文献

財団法人大学基準協会(2009)．大学評価ハンドブック．財団法人大学基準協会．

文部科学省(2008)．小学校学習指導要領．東京書籍．

文部科学省(2008)．中学校学習指導要領．東山書房．

文部科学省(2008)．中学校学習指導要領解説 総則編．ぎょうせい．

文部科学省(2009)．高等学校学習指導要領．

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf), (参照 2009-03-09)．